

シンポジウム総合討論



北垣：それでは、おそろいでありますので、これから質疑応答に入りたいと思います。どなたからでも構いませんが、お名前を最初に言って簡単に質問をしてください。特にどの先生に質問であるということをおっしゃってくださると幸いです。なお、今日のパネルディスカッションは『新島研究』に載るはずであります。従って、編集いたしますので、載らない場合もあります。そのことをご承知いただきたいと思います。どなたでも、ど

うぞ。

A：それでは最初の質問ですが、名前を申します。A と申します。新島研究第1部門の研究員の1人であります。

最初に当てていただきましたので、4人の先生に共通する質問を含めて出させていたいただきたいと思います。新島襄の欧米教育視察、岩倉使節団の田中不二麿の通訳の形で欧米の教育事情を視察された、そのレポートを4人の先生からお聞きしました。中でもとりわけ共通しているものが、新島襄の信教の自由の問題であったと思います。とりわけ『新島全集』に載っているブリテン寺院のレポートです。イギリスで書かれたものだと思いますが、ブリテン寺院のレポートというのは、信教自由が認められている国はアメリカだけだ。イギリスには一部認められている。これが国民にとっていかに大事なものであるか、ということを新島先生が強調なされたと思います。

その中でもとりわけ4人の先生に共通した意識だと思えますけれども、大越先生の『理事功程』の中で言葉を引っ張り出されて、新島は「私は日本政府の奴隷ではなく、自由人として人として参加したのである」という言葉があるのです。これはごっつい言葉で、今私たちは、同志社教育の中で新島先生のこの言葉は一番学ばなければならない、重要な意義を持っていると思

ます。

この日本政府の奴隷ではなくという言葉は、新島先生が脱国されたのは徳川幕府に抵抗する精神、自由を剥奪する徳川幕府に抵抗する、そういう奴隷にはなりたくないということです。ここでは明治政府の奴隷にはなりたくないということを言われているのではない、とはっきり明言されているように思うのですが、4人の先生はどのように思われますか、ということですか。

北垣：新島の自由に対する考え方ですね。徳川幕府は明らかに圧政であって自由はなかったと。自分は自由の人間であるということは、明治政府に対して言っているのでしょうか、という質問ですね。

北垣：では、井上先生から順番にお1人ずつ。



井上：ありがとうございます。私は次のように考えております。新島は徳川幕府においてもあるいは明治政府の時代になっても奴隷になりたくない。自由人でありたいという気持ちは一貫していると思います。

しかし、明治政府になってその新島をして奴隷にさせるような要因が、例えば天皇制であるとか、あるいは上からの急速な近代化であるとか、そういったことに原因があるんだという点に彼は突っ込んで意見を述べているということは、私は存じません。しかし、やんわりと彼は天皇制を否定している人物ではないなど。けれども、天皇制を肯定している人物ではない。自分が死んだらまた自分の思想を受け継いでくれる人はいるんだし、そういう人のためにも自分は今自分の主体性を示しておこうという、そういうやんわりした姿勢を一部持っている人ではないかなということを思いました。

北垣：大越さんお願いします。



大越：はい、ここでの奴隷という言葉は、日本政府から留学金を全部出してもらおうとか政府の役人の1人になるということは嫌だ。あくまで1市民になりたい、市民として参加したい。

要は付度とか自分の思うことを言えない。お金をもらっているから偉い方の言う通りで黙っているとか、そういうことは嫌だというような非常に近代的な現代的な自由な感覚を持っていた方だと思っています。

北垣：坂井さん、お願いします。



坂井：われわれは自由とかあるいは民主主義だとか、あるいは信仰の自由、あるいはその権利という言葉を知ると、非常に現代的な概念というものを想定します。確かに新島は自由の民、要するに文明を形成する人格というのは、そうでなければならぬというふうに申しますし、おそらくそうだったんだろうと思います。そういった意味では現代人に通じる何かを提示していたのかも分かりません。

では、例えば、彼はアメリカのクリスチャンたち、特に組合教会の人たち、ユニテリアンに対しては、新神学に対しては比較的批判的だったと思います。実はこのキリスト者たちが常に自由人であり得たかという、ものすごい疑問が一方でもあるわけです。

ですから、キリスト教を獲得したことが、自由たり得るかという、そういう疑問もあります。私は基本的には、新島はこの時代にあっては先進的な人の1人ではあっただろうというふうには思います。そういった意味ではそこでおいとかせていただきます。

北垣：明楽さん、お願いします。

明楽：私の今日の報告の中にもあるんですけども、新島自身は、幕末にも自分自身が自由であったという思いは青春時代の中に述べているんですけど



ども、その頃の自由というのは、いろいろな藩務の中から自由になりたいという、自分の思うような学問をしてみたいというような、個人的な欲求を表現していると思います。それからニューイングランドに行って、具体的なアメリカの制度なども学ぶことによって、よりアメリカのデモクラシーについても理解が進んでいったと思います。

ただ、信教自由とか政教分離論については、コネチカットといますけれども、ニューイングランドも特殊な事情もあって、なかなか 1848 年でしたか、40 年代に政教分離がはっきりするのですけれども、それがコネチカットの最もニューイングランド神学と言えば、保守的な人たちが多いところでは、信教、政教分離というのが、実感として辞書的に人々の中に入っていったかということ、それがなかなかそうではなかった。私の憶測ですが、新島を取り巻く人たちの中でも、まだそういうふうなことがあまり明示的に語られることがなかったのではないかと。そういうことで、新島自身が田中に指摘されるまで政教分離について啓発がなかったということの意味しているように思います。

レポートの中での政教分離の話とかが出てくるのは、そういうことをいったん知った上で、新たに近代的な自由権に基づいて、政教分離もそうだし、信教の自由もあるんだということもはっきりと認識したレベルでの話だと思います。そういう意味では新島自身が、近代的な人権思想を体得した上で言っていると思います。そういう意味では段階的に違って私は進歩していったのではないかと考えています。

北垣：ありがとうございます。今の A さんのご質問に関連しても申すのですが、今日のプログラムの下の方に企画趣旨という欄がありまして、新島襄はアンドーヴァー神学校在学中の 1872～1873 年の 1 年を岩倉使節団の団員としてアメリカ、ヨーロッパ 8 カ国の教育制度の調査視察を行った。岩倉使節団の団員としてというのは今日のディスカッションのコンテキストからするとどうなるのでしょうかね。

井上：今のご質問に対して私はこのように思います。団員としてというの

は、明治4年の東京を出発する時に団員になっていた人間のことを言うのか、それと1872年の3月にワシントンで会って、森有礼等の紹介から団員の仕事を日当6ドルから8ドルをもらってやった新島も団員に扱われるのか。これはちょっと法律上の問題でもあって難しいようでも思いますが、私は明治4年の東京出発時に彼はそのメンバーに入らなかったわけですから正式な意味での団員としてという言い方は、ちょっと問題ありというように思っております。

大越：私は形式論では団員であったということを過去も何度も申し上げておまして、私のレジュメのところにも文部省、文部大臣との田中のレポートの中でも本省に付属するというごまかすし、辞令も出ておりますし、実際にギャラも三等書記官等々のものをもらっているという意味で、アメリカから参加した団員である。最後は随行という任務を1月にとくとくということで、国からの辞令も出ております。

ただ、団員としても、自由な契約をしてお金をもらう、お金をもらって協力するというでメンバーに参加する。例えば、オリンピックの団員としてある方が参加した時に、その人はでは文部省の役員かというそうではない。どこそこの例えば社会団に入っている人だったり、プロの人だったりするわけですから、ただオリンピックの日本団員ということは団員でございますので、団員であるということで申し上げたいと思います。

北垣：坂井さん。明楽さんご意見があれば、どうぞ。

明楽：私も形式的に団員だったと思います。そのことは大越さんのご報告でよく分かったと思います。ただ、コンテキストということについて言えば、実際には田中と一緒に行動をしたということの意味が非常に大きくて、新島の方も田中を教化しようとするのですけれども、田中もかなり揺れるというか、新島に関心を持つしアメリカの教育に関心を持っていました。先ほど大越さんも言ったように、非常に新島に対して好意的だし、アメリカの教育にも関心を示す。若いから余計に揺れるのだと思うのですが、そういう柔軟な姿勢が田中にはあって、それがアメリカおよびヨーロッパでも、そういう視点でしっかり行くことを可能にさせた面があります。そういう意味では田中と欧米視察、教育視察に行ったのは非常にラッキーだったと思います。それ

が彼の視野を非常に広げる結果になっていたと思います。

北垣：坂井さん、ご意見ありますか。

坂井：岩倉使節団の一員としては、要するに使節団そのものとしては、おそらく新島も使節団の1人としてカウントできると思います。ところが、新島は田中とのめぐり合いのときもありますように、一種超然と個人として、しているわけです。そういう部分で見たときに、新島の意識はお手伝いに来ているんだ。あるいは契約でやって来ているのだという意識の方が強烈だったのではないかと。明らかに通訳としてビジネスライクに処理されていく、あるいは処理していくという、そういう意識性の温度差というのか、それが新島にはあったのではないかと、という気がしています。

一概に片方を立てれば片方が立たず、みたいなことがあって一概に言えないのではないかと。ただ、先ほどから形式と言われていますが、明治政府としては、十把一絡げにして、政府からお金を出すから、みたいなところでやった方がまともはいいです。そんな気がしています。

北垣：大越さん。

大越：少し申し上げたいのですが、過去に2000年前後のところで私は新島が使節団の団員であったということを研究会で報告した時に、そんなはずがないとそういうことでお叱りをいただいたことがございました。それは2つの意味で皆様は新島に対して偏見を持たれているのではないかと。1つは、新島先生は同志社を作ったけれどもそんなに偉い人ではないのではないかと、という偏見です。もう1つは、新島は自由な人で明治政府に雇われるなんてあるはずがない、というようなお考えだったような気がします。

ただ、彼は自由意思で契約はしましたがけれども、『理事功程』で必死に、ドイツでもまとめているわけで、これは、本当に自由契約でちょっと行ってやろうか、ということであればそこまでやらないですね。身体を壊してまでやっていますので、そういう意味では非常に純粋で、そうは言ってもいったんやると決めたら誰よりもやるというようなところが、新島の偉さだだったと、思っております。

北垣：ありがとうございます。ついでに新島襄は岩倉使節団の団員と呼ばれることを喜んだんだろうか、という質問をしてみたいんですけども、も

うこの問題ばかりではまずいですからやめます。他の質問をどうぞ。

B: 井上先生に中心的にちょっと質問をさせていただきたいのです。今までこの新島研究会でいろいろと学んでおりましたが、密航ということについて、新島襄の密航、脱国について、あまり大きな感覚がなかったような意思を受けていたんですが、今日、井上先生は日本の国家のために新島襄が脱国をしたと。それを聞いた時に僕の頭にいくつかのタッタッタと浮かんだのは、例えばオランダと日本は400年から貿易をしていましたが、オランダはおとなしかったですよ。ところが、フランスはいつの間にか幕府と結びついて相当な利益を挙げ、兵器を売りいろんな使節団が来ていましたね。ところがイギリスは薩英戦争で日本に地盤を築きました。ところが、2つ違う国があるんですよ。1つはロシアです。ロシアの艦隊司令ブチャーチンが軍艦を率いて日本中のいろんな所を荒らしていますね。大砲を撃ち込んで陸戦隊をあげて、水やまきや野菜や牛、鳥などを全部盗んで行ってた皆さんの日本人にすごい影響を与えています。

それに対して最後にアメリカは平和使節のように言われていますが、ペリーが来て最初にやったことは、機関だけで103発の砲弾を日本に撃ち込んでいますね。ところがそれは日本国へは撃ち込んでないです。海です。彼がいわくはこれは祝砲だと。祝砲はどちらもが認めあって撃つものではないのか、というようなことも思っています。そのような状態の日本から新島襄が脱国したという事を考えるときに、今日の井上先生の日本の国のために脱国したという発言が僕にはものすごく頼もしく聞こえたのですが、その根拠が僕には分からないので、質問させていただきます。

北垣: 井上先生へどうぞ。

井上: ありがとうございます。日本のためにやったんだということは、しばしば父親宛の手紙に出てまいります。それからもう1つは、もしも自由のために脱国をするという気持ちであれば、当時若者は何万といたわけですから、新島以外にも何百人かの若者がいずれかの国に密航したであろうと思われませんがしていませんね。これはやはり当時は密航したら死刑にするとか、家族まで災いをというがんじがらめになった法律を恐れて、当時の若者たちは、国禁を犯して密航をするという人間が新島以外は出てこなかったのか。

その10年前は吉田松蔭がいますけれども、彼の場合は少し選んだ場所も悪いし単刀直入すぎてあれでは捕まるという印象を私は持ちます。

私は新島の密航というのは、自由を求めてというよりはもっと大きな大義名分があったからこそ、彼の行動を正当化した、合理化したのではないかというのが私の持論でございます。

C: 吉田松蔭が僕に言わせれば無謀な出国をしますよね。それで捕まってしまった。ところが新島襄は非常にいい言葉は使いにくいんですが、ちょっとずるいところもあったような素晴らしい脱国の仕方をしますね。即成功しますね。その辺も私は新島襄がすごく頭が良い人だなと。運だけではなくて頭もいい人だなと思って考えているのです。

井上: 私は新島を調べてみまして彼が箱館に行く前、それから行ってから非常に慎重に脱国のチャンスを狙っていました。あの慎重さというのがやはり単なる思いつきでよその国に行こうという発想ではなくて、非常に慎重な何がしかの目的を明確に持った上でないといけないような行為ではなかったのかと思っています。

B: 北垣先生もし関連してお答え願えましたら。

北垣: 僕の意見は井上先生のただいまのお答えに対照的なのが伊藤彌彦さんの考え方だと思います。伊藤彌彦先生はもっと野心的な青年の考え方で行動している、という意見です。その意味で面白いと思います。

僕は両方の要素があったらと思うと思います。井上先生ほど、僕は国のためということ了新島は本当に思っていたかどうかは、少し疑問に思います。というのは、お父さんの民治を納得させるためには、青年の狂気抑えがたくと言って国のためにやったんですよ、ということ強調するのですが、自分自身を納得させるためには、もう少し伸び伸びと考えていたのではないかと、いうふうに思います。

北垣: はい、Aさん。

A: 先に質問したので黙ってしようかと思ったんですけれども、今のご質問ですね、アメリカのペリー艦隊の来航とロシアの艦隊の来航とが日本を威嚇したという、大砲を撃ったということは、おっしゃいましたけれども、どの文献に出ておりますか、ということをお聞きしたい。というのは、ペリーも

ブチャーチンも祝砲は撃ちました。ペリーは江戸湾まで強制的に入って測量をしています。幕府の許可を得ずに測量はやっています。実弾は1発もペリー艦隊は撃っていません。ブチャーチンの艦隊も1発の実弾も江戸城に向かって、あるいは長崎に向かって撃っていません。だから、あなたがもし実弾を撃ったということをおっしゃるのならどの文献に出ていますか。それから、もし、それが正しくなければ、今の発言は否定してください。

北垣：お答えになりますか。

B：もめるような話をする気はないんですが、私はペリーが実弾を撃ったとは、当然、言っていません。祝砲だという限りは、玉を込めませんからペリーが機関だけで103発撃ったのは全部祝砲とペリーも言い切っています。だから、それはそうだろうと私も思います。だから、砲弾は、実弾は日本の本土に向かって撃っておりません。それから、ブチャーチンの方は、松前藩および南部藩およびその他のところでそのような私は本の名前が思い出せないのですが、一生懸命日本の武士が山の中まで民衆を連れて逃げた、といういろいろな話を讀んだだけで、私は学者でも何でもないのに、この本にこう載っておりましたとは言いません。けれども、ロシアから来た艦隊は日本から水なり材木というのはたきぎなり、あるいは野菜なりあるいは牛とかをとっていかない限り、寄る港がなかったですね。アメリカは上海があり何があり、オランダは台湾があり、いろいろなことがあります。日本はなかったから、それは仕方がなかったと思うのですが、NHKのテレビで、何本か出てきましたけれども。武士が一生懸命逃げまどっている姿が出ておりましたね。

だから、この本かと言われたら私はそれは今忘れてしまっていますので、よう言いません。それで取り消せと言われるのなら取り消します。そこまで、私は……。大事なところですよ。改めて僕は調べようとは思っていませんけれども、僕は1つの何かで讀んだわけではないです。いろいろなところでいろいろな本を通じて幕末のいろいろなものを讀んでいて頭に入ったものを残しているだけで、はい。もしお気に触ったら申し訳ありません。

A：お気に障るとかいうのではなくて、事実を。

B：いや、だから、僕が何かで見ましたけれども、本の名前は覚えておりま

せんということで申し訳ないです。だからこれは研究発表ではないので、僕は質問なんでね。

北垣：ちょっとお待ちください。明楽さんが一言答えたいそうです。

明楽：すみません。密航の話聞いていて私も一言申し上げたくなりました。

先ほどから国家のためという話が出ました。私はそういうふうな思いも彼にはあったと思います。それから勉強がしたいという、いろいろ私は憂国の志士としての絶対化という言葉を使いましたが、憂国、日本のために役に立ちたいという思いはあって、それは学問をすることによって、自分が国のために貢献し自分の学問を高めていきたいという思いはあるのですが、ただ、別に新島自身が自伝でも書いているのはやはりキリスト教に非常に興味を持ったということです。だから、福音が伝えられてくるアメリカに行って勉強したい。もっと神の道はどういうものかについて勉強したいという思いがまずあったから、彼はアメリカに向けて密航したというのは彼自身が書くことです。ですから、そこは押さえないと国家のためとかいうことになる、吉田松蔭とどこが違うのかという、要領が良かったか悪かったかという話になるのです。

新島にはやはりキリスト教を勉強したいという思いがある、というのがみんなに伝わるから、ロシア正教にしてもみんなが新島を助けた。本気でこの人は、キリスト教について勉強したい人なんだ。だから、大事に何とかしてあげようという思いにみんながなったのであって、国家のため、日本のためとか、吉田松蔭のような考え方はやはり違うところがある。だから、おのずと周りの人たちがアメリカに渡ってからでも、ハーディーにしてもみんな新島のそういう思いを成就させてあげようと思ってしまうような学びの精神というのか、そういうものが彼にはあったから、みんなの心を動かしていたのではないかと思います。だから、まずキリスト教を勉強したいという思いが根本的にあった、ということが大事だと思います。

北垣：はい、ありがとうございます。

D：どうも今日はありがとうございました。4人の先生方、いろいろ新しい教育観点というのでしょうか、述べていただいたんですけども、大越さん

は特に毎回説得力のある説明をされておりますので、大越さんにお聞きしたいのです。

まず、冒頭に尾形裕康さんの『学制成立史の研究』を紹介していただいて、この人は相当に新島襄を評価しているな、というところですが、この新島の貢献のところ、アメリカに渡ってから7年間アメリカ教育制度、とりわけ小学校教育を調査研究したうんちくを述べてそれで非常に貢献したと書いてあります。

確かに『理事功程』15巻の中では重要な役割を果たしたのは、事実だと思えます。このあたりの助言の評価ですが、もしあれば教えていただきたいと思えます。

もう1つは、詳細に説明された中で推定ですけれども、草稿の中で22カ所書いたのではないかと。だけどそのうちの9カ所は「？」をしてあるんですね。その辺りの資料の分け方をどうされているのか、この2点をよろしく願いいたします。

大越：ありがとうございます。まず、尾形裕康さんの『学制成立史の研究』というのは、ずいぶん古い本ではございますが、新島のことを非常にベタ褒めしている本です。これを読むと正しいところもあるし、間違えているところもある、というのは私の結論です。全部が間違いではない。持ち上げすぎではない、というところを申し上げたいと思えます。特に本当かなというところで、学制のところもよく調べますと、学制自体に対して彼が理念を与えたというのはちょっと違うと思えますが、学制の中の小学校の科目に関して情報提供したのはたぶん新島襄だろうと思っています。

それから『理事功程』に関しても、全部書いたというのは、誰でも言うのは誤りであって、誤りではありますが、『理事功程』というのは非常にたくさんの方のいろんなところの使節団のメンバーから出ています。

いろんなところの国会で、デジタルライブラリーで、岩倉使節団に関しては非常に情報が入っていて、それを見ると『理事功程』という名前だけで、数十は多すぎるかもしれませんが、20、30ぐらいの名前のものがあります。その中でも文部省の『理事功程』というのは、群を抜いてまとまっている。それは新島に触発されて、新島が書いた原稿というのが非常に契機になって

あれだけ充実したんだろうと思っています。

あとは今おっしゃっていただいた『理事功程』の分け方です。まず、新島の原稿があるか、草稿があるか。あれば新島の執筆です。それから、新島が会った人たちとのヒアリングかどうか。特に新島だけ田中と会っているかどうかということも見て、それは、英文の日記とか手紙とか見たときに、まさに新島しか会ってないとかいうのは丸です。微妙なのが学校の法規です。誰が訳しても同じような、間違いでなければ、訳せるものでなければ、新島も書いたかもしれないなというところで、ちょっとクエスションかなという。全く関係ないなというは付けておらないです。それくらいの分け方です。

北垣：今の『理事功程』に新島がどれほど、どの程度貢献しているのかというのは、非常に大きな問題だと私は思います。今までの新島研究家のうちではほとんど貢献してないという意見とかなり貢献しているという意見と、今日のようにこの部分とこの部分を抜き出して説明していただいたわけですね。それでは結局どの程度の貢献だったのか、ということに落ち着くのではないのでしょうか。

大越：はい、ありがとうございます。やはり、どれだけ書いたか、全部で500ページぐらいあるんですけども、何ページぐらい書いたかはあまり問題ではなくて、530ページぐらいの『理事功程』という形でまとめ上がった。その最大の貢献者は新島だと思っています。

北垣：ありがとうございます。つまり今日も日本の小学校のカリキュラムに関して新島が貢献していたかも分からないということをおっしゃったわけですね。その辺のことでこういうふうな1つ面白い事実があります。

例えば、新島を非常に支援したアルフィーアス・ハーディーのごときは、日本の教育制度をスタートさせたのは新島のせいだ、というふうに信じていたんですね。それは、ハーディーが新島を支援していたからそう信じた気持ちちはよく分るのですが、しかしハーディーははっきりとそう言っています。それはラットランドで新島がフェアウェルのアドレスをやるときに、ハーディーが紹介者だったんです。日本は教育的に面白い実験を始めたわけだけれども、「その計画を立てた男がここに立っているんです」とそういう言

い方で説明しています。だから、100% 新島の貢献だという考え方になるわけですね。僕はその辺はやっぱり新島研究会はこれからしっかりとやって何とかパーセンテージに近づきたいものだと思います。よろしく願います。他にいかがでしょうか。

E：ちょっと『理事功程』のことで議論がございませけれども、今日私が提供しました、パスファインダーの中に書いております。私は沖田先生が書かれた論文をお読みいただくと非常に立体的になるのではないかと、沖田先生はこういう見方をしておられる、ということで今日のお話プラスこれをお読みいただくことがいいと思います。ちょっとそれだけ……。

質問というのですか、私がちょっと疑問に思いましたのは、本日のテーマが新島襄の米欧教育視察 1872 年から 73 年と書いてありますので、どうしても教育にシフトしがちというのですか、そちら側に重点が置かれるような気がしています。しかし私は新島襄の福祉思想というものは、いつどういう形で形成されたのかと思っています。私はこの間に彼が見た体験施設というのは、養老院であったり、刑務所であったり、監獄であったり、いろいろします。それは、他の大学時代に得たものとは違う体験だったと思います。ですから、私はタイトルがタイトルですし、テーマがテーマですのであれですが、是非ともこの機会に、彼の福祉思想の形成に何らかの寄与があったのではないかと、思うように思うのですが、諸先生方は、どう思っておられるかお聞きしたいと思います。

北垣：井上先生。

井上：福祉思想という言葉は現在使われている概念であります、それをさかのぼって彼が使っていたであろう福祉の概念に近づけて申し上げますと、私は『連邦史略』を新島が読んだときに、あの中にアメリカでは話し合いで事を決めるのだとかそんなこと以外に、例えば年をとった人たちはそして面倒見る人がいない場合は、地域が施設を作ってそこに収容して老後を過ごさせるとか、そういう今の言葉で言う福祉にあたるというようなものがいくつか挙がっておりました。そしてそういうものが、ただ単に『連邦史略』だけではなくて、実際に新島がニューイングランドで生活する間で彼がいろんなところで実体験をするわけです。それは大きなものがあつたであろうし、同

じことがヨーロッパ大陸でも、例えば、ハンディキャップを持った子どもたちや罪を犯した人たちの厚生福祉、福利施設やらそういうものを見る中で、やっぱり一人一人の人間が大切にされているんだなということ、実際に彼は感じたであろう。そしてそれに対する日本は、江戸幕府は全くそういうものをやってないと言っても言い過ぎではないような状況であったという、この2つの大きな違いだが、彼の意識の下に入って、それが日本に帰国してからも彼の教育観を動かしていった1つになっているのではないかと思います。

北垣：時間が切迫しているんですが、せっかく明楽さんがいらしてくださっているので、司会者から明楽さんに質問です。

新島襄は田中理事官についてヨーロッパの視察をしますね。そのヨーロッパの視察が新島をどれだけ成長させたかという問題です。あなたはご自分の異教国の新島襄において非常に新島襄を啓発したんだという意味のことを書いていらっしゃると思いました。また今日、読み上げられたペーパーにもその事が強調されているように思いますが、そのへんのことはいかがでしょうか。簡単にお答えいただければありがたいです。

明楽：最初はニューイングランドにわたってニューイングランドの人たちからキリスト教も学ぶし、学校教育とかも受けさせてもらって勉強していくわけですけども、やっぱりそれは当時のアメリカのプロテスタントの人たちの家庭環境であったり、大学教育とかも含めての教育環境だったりするので、そこにはおのずからアメリカ的というふうな限定がやっぱりあったのではないかと思います。そういう意味では、アメリカを相対的に地理的に歴史的に見直してみるという契機を与えたのは、欧米教育者たちだろうと思います。

それから先ほど申し上げましたような自由権思想についても、往々にして啓発的なことを言えば、宗教革命があって自由権思想が発展したんだ、という一般的にはよく言われる言い方ですけども、たぶんそういうふうに行われる中で彼もアメリカでは勉強をしていたと思うのですが、それだけだったらそれ以外の異教国の人たちとどういう思想とか宗教というのはどういうものなのか。全く意味がないのか。新島自身が、自分が日本の士族層で

あって、その新島自身がこういうふうにはキリスト教を受容していく過程というのは一体何だったのか。異教の日本人としてキリスト教をとらえる。西洋の思想を日本人の思想としてもとらえていくための、そういう思想的な広がりを受けたのがそういうヨーロッパ教育視察だったのではないかなと思うのです。なかなか難しい大きい問題です。

北垣：そうは言われますけど、新島の観察ではヨーロッパの方がキリスト教の観点からすると墮落しているということをしょっちゅういろんなところで言っているし、ハーディーさんに報告しているように思います。日曜日でも洗濯をしている。ニューイングランドではそういうことはないのです。それから新島がしばしば使う言葉で、ヨーロッパの不信仰という言葉があります。そのへんはどうでしょうか。

井上：新島の中ではアメリカのキリスト教徒が敬虔であってキリスト教徒らしい、と思っていると思うのですよ。良い面はそれで評価しつつも、少しその当時の19世紀後半の社会の思想としてみた時に、神の愛の説教に出てくるような当時のアメリカの人にもそういう信仰心の薄らぎというのはあって、それを正していかないとアメリカ自身も自由な国が崩壊していくという危機を持つわけです。そういう意味ではものすごく先を、アメリカ的なキリスト教の良さ、敬虔さは彼自身も引き継ごうとしているのだと思います。それをもっと彼の場合は、すべての人民、日本で言えば、3,300万人を救うとか、そういう万人を解放していくための思想として新島なりに読み替えていく、ということを一生涯懸命考えていたのだらうと思います。

ですから、一方ではそういう社会主義とか無神論が出てくる状況は、ヨーロッパにどんどん出てくるし、20世紀的な階級問題が出てくるわけです。それをそういうふうな社会問題を見つつも彼の場合は、キリスト教的な道徳を持ってそれを社会的な統合をもう一度果たしていくという方向で彼は考えているわけです。非常に気難しい。彼自身も敬虔というものと、例えば、学術を重んじる面ではあらゆる学問を取り入れようという意味があるわけですから、突き詰めていけば必ずいろいろな矛盾が出て来るわけですがけれども、新島の場合は、そういったところは信じているというのか、2つのものが分裂しないで統一的にいけると思っている、信じている人だと思います。

北垣：はい、ありがとうございました。

明楽：上手く言えないんですけど。

北垣：時間が来ましたので、このへんで質疑応答を終わりたいと思います。少し明楽さんは早口でペーパーを読まれましたので、内容は非常に面白いと思いますから、皆さん、後でぜひお読みくださいますようお願いいたします。

パネリストの4人の先生、ありがとうございました。これで質疑応答を終わります。